

## 二〇一三年アートグループ活動報告

今年度のアートグループは、これまでどおりファシリテーターの著者が講師の椋田三佳さんとともにグループを運営し、ルーム研修員の市橋章子さんにも参加していただいた。昨年度から始めた各回のグループ活動報告をWeb上で公開することも継続して行った。人間科学研究所の活動自体が再編された年度でもあり、予算上厳しい状況となったため、既存の画材を生かした技法を多用した一年だったが、参加者の作品からは面白い表現がたくさん生まれ、小さいグループ活動ならではの穏やかな雰囲気での運営ができたと思う。その中でもいくつかの印象的な回について簡単に記載する。

アートグループでは、毎回課題となる画材やテーマを参加者が自由に解釈して制作するスタイルをとっている。前期の第一回目では、「おはながみ」を使ってコラージュ制作を行った。ちょうど昨年度末に人間科学研究所主催のアートセラピー・ワークショップで、おはながみ・ティッシュユー・ペーパーが使用されたことに触発されて、アートグループでも同じ素材を使ったのである。ワークショップに参加した筆者と椋田さんは、コラージュ制作に短時間集中してより無意識的な表現を目

指し、そこに表れたものは自分だと見なして向き合うというセラピー課題を興味深く経験した。しかし、アートグループではより自由な表現とアートに親しむ体験を重視しているので、画材を提示するに留め、メンバーは好きなようにコラージュを制作する方向でグループを進めた。今回使った用紙は薄くペラペラの紙であるにもかかわらず、繊維に沿って千切るときは簡単に切れるのに、繊維に逆らうとなかなか切れにくく思うような形にならないというもので、デザイン性の高いものをつくるにはハサミを使うほうが楽という性質だった。紙の質感をいろいろな点で感じ取れる作業だったと思われる。参加者は二十色以上ある紙を破ったり切ったりして、画用紙や色画用紙の上に液体のりの薄めたものを筆で塗りながらどんどん貼っていく、いろいろなタイプの作品が出来上がった。立体的な感じの作品(図1)あり、平面的なコラージュでありながら、レイヤーのもつ質感によって存在感を醸し出す作品(図2)あり、参加者も他の人の作品を見て「こういうこともできるんだな」と発見することの多い回だったと思う。

前期第四回目の回ではモビールを制作した。盛夏に涼を感じるためということもあるが、その前の回でワイヤーと粘土やスチロール球を使って動きを感じさせる作品を作った創作上の流れがあったので、「動き」を念頭に入れた制作課題になったのである。椋田さんは特殊な画材としてたこ糸とワイヤー、制作

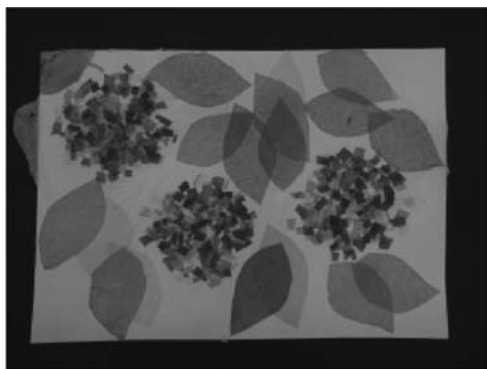


図2

ねった枝に全員分を掛ける。とそれぞれの作品の面白さが相乗効果を生んで楽しい雰囲気となった。ディスプレイの仕方を工夫することで作品の見え方



図1

のヒントとして紋切の画集を提示した。筆者はその本の中に使ってみたい模様を発見したが、参加者の中には画材を駆使

してオリジナル度の高い作品をつくる人もいた。シェアリングの時に作品を三極の枝に吊るして鑑賞した(図3)ののだが、白くう

が変わることを再確認した回だった。

後期の第一回目のグループは、見学者も交えて比較的参加人数の多い回だった。この日の課題はローラーに絵具を付けて模様をつけるようにして描くという技法を試すというもの(図4)で、先に地にクレヨンで絵を描いて浮かせるとか、後から絵具で加筆するなど工夫をすることもできた。技法としては単純だが、何かを具体的に描くことは難しいので、抽象的な表現に慣れていないと制作が重荷になったり、作品のもつ力に気圧されてしまうのではなかろうかという心配も筆者としてはあったのだが、参加者は一人三作くらいいろいろな描き方を試みて個性的な作品を生んでいた。この回は、普段の回ではあまり



図3



図4

ト課題に基づき作品を完成させるといふ営みは、かなりの心のエネルギーを必要とすることだとつくづく思い知らされた十三年間であつた。社会復帰を目指す人の中には、そこまでのエネルギーは保って参加することは難しく、見学だけで終えていく人もいたし、グループに参加する過

できない共同制作を行い、模造紙の上にマスキングテープを全員で貼った後、交代でローラーによる着彩をして作品を完成させた(図5)。グループに初めて参加した人もいる中で、各自が思い思いにローラーを動かしたにもかかわらず、予想以上に調和のとれた作品が仕上がり、口々に「面白いね」と言いながらグループを終えられた。

アートグループの活動は、今年度をもってこれまでのグループ・アクティヴィティ形式を終了することになった。カウンセリングルームの一室で仲間のいる中で一回ごとに異なったア



図5

参加であっても一回のアートグループで何かを創るという行為に集中して取り組むことで作品は完成し、それを一緒に眺める人がいるということ、参加前には存在しなかったものごとが生じるのは確かであり、そういう場を維持してこられたことが、この活動の最大の意義だったと筆者としては考えている。

(内藤 あかね)

程で、目に見えて安定的に振舞えるようになった人もいる。比較的健康度の高い参加者でも、自分の求める表現、体験をここで見つけられる人もいれば、見切りをつける人もいる。しかし参加回数が多い人には作品やグループへのかかわりに成長の跡が伺えるといふだけでなく、少ない